

154 陶磁器のジャポニズム（その2）（2023年3月30日）

前回に続いて、リモージュのデュブーシェ国立陶磁美術館に展示されている陶磁器の中で、日本から影響を受けたフランスの陶磁器をご紹介します。

セルビス・ルソーを製作したウジェーヌ・ルソーは、1870年代になると、セーブル国立製陶所の装飾画家であったアンリ・ランベール（Henri LAMBERT）（1836-1909）に依頼して、新たなジャポニズムの食器セットを製作しました。それが、セルビス・ランベール（写真右）です。エッチングを使ったセルビス・ルソーとは異なり、こちらはランベールが



自ら図柄を描いたものです。木の枝に止まるとんぼを描いた図柄は、いかにも日本的です。でも、どこか日本の浮世絵や陶磁器の図柄とは異なる印象を受けました。何が違うのかしばらく考えて、とんぼと一緒に描かれている木の枝が、梅の枝であることに気付きました。梅は春に咲く花で、とんぼは秋を象徴する虫です。梅の花ととんぼは季節が異なりますので、梅の花が咲く枝に止まるとんぼという図柄は、日本ではあまり想像できません。

陶芸家のテオドール・デック（Théodore DECK）（1823-1891）は、1858年に自身の工房を立ち上げ、日本、中国、ペルシャ、トルコ、アラブなど様々な国から影響を受けた作品を制作しました。デックは、日本の九谷焼からインスピレーションを受けた作品を残しています。九谷焼とは、石川県南部で江戸時代から作り続けられている陶磁器で、色鮮やかな絵付けが施されているのが特徴です。



美術館に展示されている二枚の大皿（写真左下）をご覧ください。どちらがデックの作品で、どちらが本物の九谷焼かお分かりになるでしょうか。右側がデックの作品で、左側が19世紀に作られた九谷焼です。両者を比べてみると、デックが九谷焼の特徴を巧みに捉えてデザインしたことがわかります。明治時代になった1868年以

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

降、政府が工芸品の輸出を後押しし、1873（明治6）年に開催されたウィーン万博を始めとする万博に出品して評価されるようになり、欧米で「ジャパン九谷」の名前で知られるようになりました。デックの作品は1878年に作られたものですので、デックが当時の流行を取り入れたことがわかります。

アルベール・ダムース（Albert DAMOUSSE）（1848-1926）は、セーブルにアトリエを構えて制作活動を行った彫刻家であり陶芸家でした。ダムースは、「日本の風景」というタイトルの皿を制作しました。皿の中に描かれた三つの円の中には、梅のような花、鶴と山が描かれています。葛飾北斎の富嶽三十六景の中で、富士山と鶴を描いた「相州梅澤左」という作品があります。山の形や鶴の姿に共通点が見られることから、ダムースがこの浮世絵を見て参考にした可能性も考えられます。



これらの作品を見ていくと、ジャポニズムが流行した時代に、フランス人の芸術家や職人たちが、日本の浮世絵や陶磁器の意匠から影響を受けて、独自のデザインとして取り入れていったことが分かり、とても興味深いと思います。

※ 美術館の展示は、変更されている可能性があります。